

特攻観音堂

九月二十一日 午後二時より 第9回特攻平和観音年次法要 於世田谷観音寺特攻観音堂

報 特 攻 会
平成3年2月
第12号
〒102 (新)
東京都千代田区九段南
4-3-7 勸借行社内
特攻隊慰霊顕彰会
特攻平和観音奉賛会
電話 03 (263) 0851

編集人 田 中 賢 一
発行人 最 上 貞 雄

特攻隊慰霊顕彰会(会長竹田恒徳殿)主催による
年次法要が、本年も恒例通り秋分の日に、御遺族、
来賓、戦友等約四〇〇名参会の下に行われた。

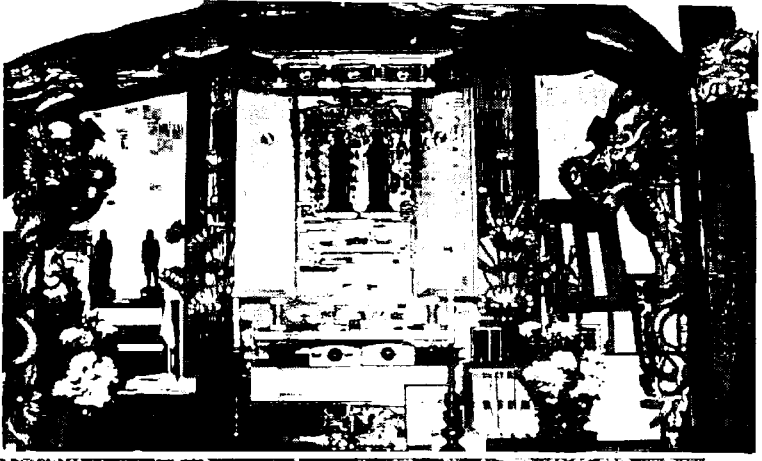
山主願文 観音寺住職 太田賢照師
祭文 会長 竹田恒徳殿
追悼の辞 遺族代表 富嶽隊曾我邦夫(55期)弟
曾我睦郎殿(60期)

来賓挨拶 駐日トルコ大使官付武官
テキン・キヤル海軍中佐

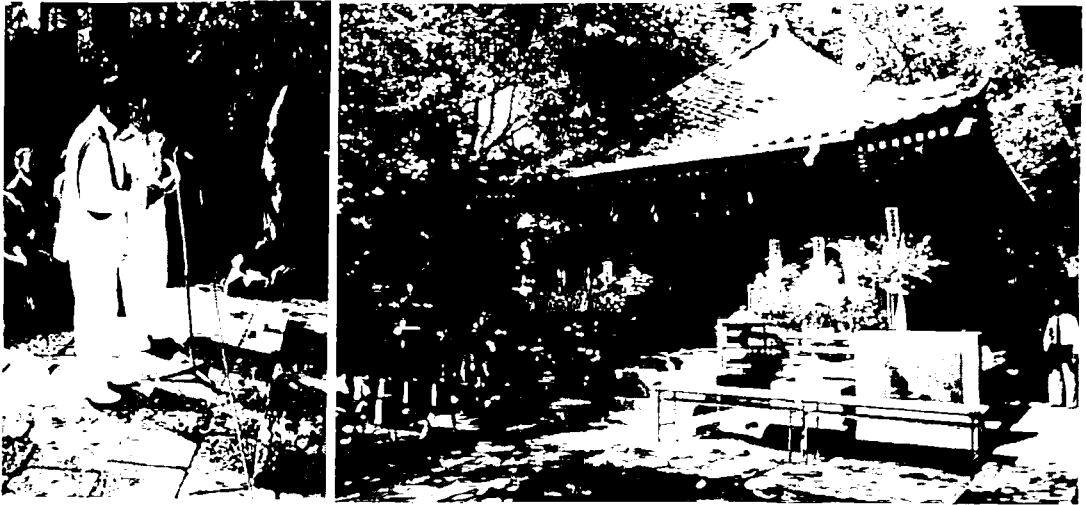
と法要が進められたが、キヤル中佐の挨拶は異色
のものであったので、ここに訳文をもって紹介す
る。内容は参会者に対する挨拶であるが、同中佐
は特攻観音に面して、英文をもって恭しく奏上し
た。なお昨年は前任者のジェンギズ・アルボズ大
佐が参列され同じような趣旨の挨拶をされた。訳
者は本会の理事上坂康氏(海兵75期)である。



祭文奏上 竹田恒徳殿



参加者焼香



第39回特攻平和観音年次法要における トルコ海軍武官キヤル中佐のあいさつ

本日ここに、祖国のため身命を捧げられた特攻隊の英霊をとむらう法要にご招待いただき、ごあいさつの機会を与えられましたことは、私にとりまして身に余る光栄であります。

私はこのたび、特攻隊遺霊顕彰会から第39回特攻平和観音年次法要にご招待を受けましたのち、この式典の意義についてあらためて考えてみました。物事の奥義を探るには長年月を要するものであります。私はこの特攻に関する限り、たちどころにその核心をつかむことができたのであります。私はトルコ人であり回教徒であります。それだからこそ私は、特攻をたやすく理解することができ、これについて日本人々と同じ信条と感情を分かち合うことができるのであろうと思っております。

日本人は、誇り高く献身的であり、勤勉で愛國的な民族として知られておりますが、われわれトルコ人もまた、同様の特性を持った民族なのであります。回教では、いかなる行為であれ、祖国のため犠牲となつて一命を捧げた者は、神によって天国に迎え入れられると信じられております。これによってわれわれトルコ人が、戦没者についてどのように考えているかがお分りいただけることでしょう。

トルコにおいては、今でも東郷提督と乃木将軍が有名であります。殊に乃木将軍は、明治三十七

・八年の日露戦争において、旅順を攻略して日本に勝利をもたらされました。その際、將軍の令息二人を含む数万人の勇士が「決死隊」となって祖国に殉じられました。この英雄的行為が当時のトルコ人に大きな影響を与えたのであります。

第一次世界大戦末期の一九一七（大正六）年、のちにトルコ共和国建国の父とうたわれたアタチルク元帥は、連合軍に対して最も困難な戦いをいどみました。この数年にわたる戦闘において、武器も弾薬も物資も欠乏している中で、十数万人の勇敢なトルコ軍兵士が肉弾攻撃を敢行し、ついに敵軍をトルコから駆逐して、祖国を救ったのであります。

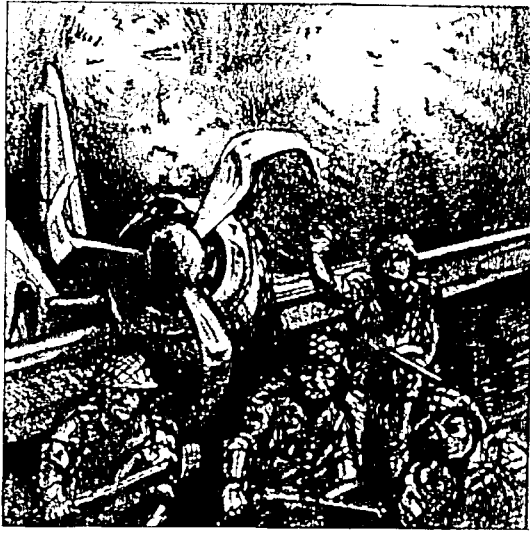
それだからこそ、私は特攻について皆様がどのように感じておられるかを理解することができるとあります。そしてこのような日本とトルコとの類似性が、両国民の仲をますます親密にしていると思ふのであります。

私は、ここにお集まりの遺族ご友人の皆様が、特攻隊戦没者の英雄的功績を常に誇りにしておられるものと信じております。最後に私は、祖国に身命を捧げられた特攻隊戦没者に対し、深い敬意を表しますとともに、そのご冥福を心からお祈り申し上げます。そしていつの日か、私も光栄ある戦没者の末席に加えられることを希求致しまして、私のつたないごあいさつを終る次第であります。

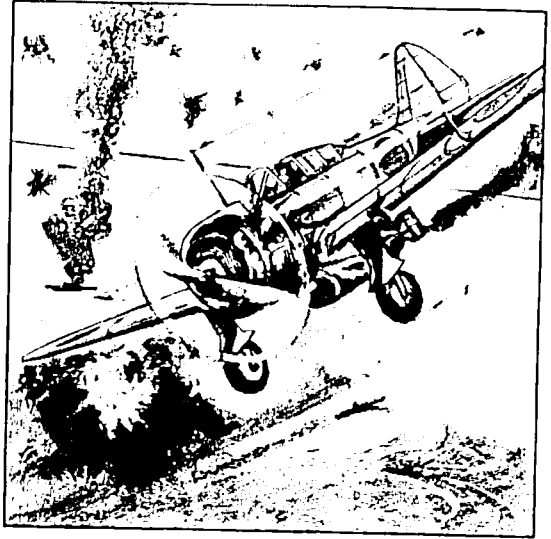
(2・9・23 文責在訳者・上坂 康)

(註) 上の写真手前がキヤル中佐、向う側は訳者

空挺特攻



航空特攻



特攻観音

年次法要に列して

秋韻ひそかに雲一つ

梵鐘流る世田谷の

大慈悲溢る観音に

心ぞ通う特攻隊

ますらおが悲しき命つみ重ね

つみ重ね守る 大和島根を

霜頭爛額ぬかつげば

臉に浮ぶ面影は

明眸皓齒眉秀いで

勾うが如き若武者よ

花負いて空撃ち征かん雲染めん

かばね悔なく我等散るなり

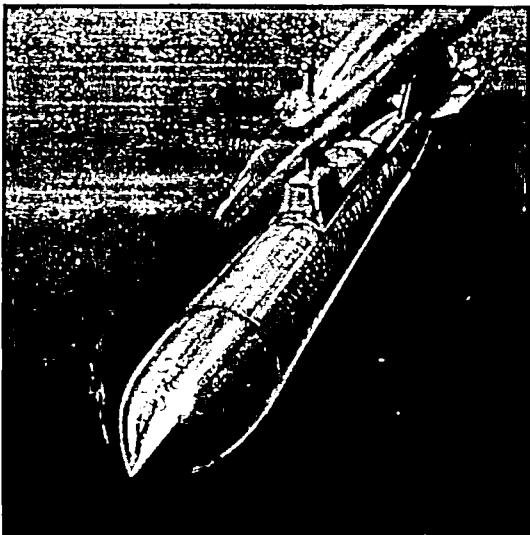
聞け平成の若人よ

大和島根の弥栄は

後に続くを信じつつ

征きにし人の形見なれ

歌 田中賢一（但し和歌二首に
ついては「頁参照」）
絵 長谷川正勝



水中特攻

水上特攻

特攻秘話

全機強行着陸を命ぜられた 挺進飛行第二戦隊三浦中隊

島山卓次

挺進飛行第一戦隊操縦者

レイテ作戦における挺進飛行隊

昭和19年11月5日、第二挺進団司令部に続いて動員下令された挺進飛行第一戦隊は、過早に進出して損害を蒙ることを避け、11月中旬台湾の嘉義に進出して、作戦を準備した。

戦隊は三コ中隊、中隊は輸送機九機と物量投下用の重爆三機、それに若干の予備機を保有していたが、これでは一回に運べる落下傘兵は、縮小編成の三コ中隊に過ぎないので、挺進飛行第二戦隊の一コ中隊が配属され、12月1日に嘉義にて第一戦隊に追及した。

中隊長は大尉三浦浩で、この隊の通称名を「阿蘇隊」といった。これで新原戦隊長は四コ中隊を掌握することが出来た。

えられたのは、聯隊からの意見具申に依るが、海岸にあるドラッグ及びタクロバン両飛行場までは、地上部隊が容易に進出できると思えなかった、そこで、ここに降下着陸する部隊は、特攻隊として人選された。特に第三聯隊差出しの、ドラッグ、タクロバン降着部隊（飛行第七十四、九十五戦隊差出しの、重爆四機の搭乗者を含めて）は、各中隊から志願者を求めたが、志願者が殺到して人選に苦慮したという。

12月3日に南サンフェルナンドに追及した第四聯隊も、態勢の整わぬまま、齊田聯隊長のたつての要望で、その一部が第一次攻撃に加えられることになった。

当初計画は次の表の通りであった。12月5日、約四〇機の挺進飛行戦隊は、嘉義からクラーク基地内アンフェ

レス飛行場に進出待機した。明くれば12月6日、高千穂降下部隊搭乗の飛行第一戦隊の輸送機二六機、急拠の変更命令で、ドラッグ飛行場強行着陸隊となった三浦中隊の輸送機九機、これもタクロバン飛行場強行着陸を命ぜられた飛行第七十四、九十五戦隊の重爆四機と、煙幕展張に任ずる重爆一三機が続き、約三〇機の戦闘機が上空を掩護し、15時40分頃離陸し、先ずネグロス島バゴロド上空に向い発進した。久し振りに見る感涙であった。

目 標	部隊別	指揮官	配当機数	降着別	飛行機隊名
ブラウエン北	第三聯隊	白井少佐	輸送機十七	降下	飛行第一戦隊
ブラウエン南	第三聯隊	桂 大尉	輸送機 六	降下	飛行第一戦隊
サンバプロ	第四聯隊	穂田大尉	輸送機 三	降下	飛行第一戦隊
ドラッグ	第三聯隊	竹本中尉	重爆 二	着陸	飛行第七四戦隊
"	第四聯隊	宮田中尉	輸送機 七	降下	飛行第二戦隊 (三浦中隊)
タクロバン	第四聯隊	神原大尉	輸送機 二	降下	同 右
"	第三聯隊	佐藤中尉	重爆 二	着陸	飛行第九五戦隊

以下三浦中隊生存者一名中の、滝口氏（当時軍曹、少飛十一期出身）の証言に依り、進攻途中の経緯と、壮烈極まる攻撃時の戦況を記述する。

滝口氏証言の要旨

12月5日、嘉義を離陸しバシー海峡を渡り比島の空に入る頃から、明日はいよいよ敵地に打ち入りだど心に決めた時から、いざ決戦場への気迫に身を引き締る境地に入った。

全機無事、クラーク基地内アンフェレス飛行場に着陸、飛行場の端に展開、掩体内に駐機して隠蔽した翼の下で一息入れている時だった。

隣りに駐機した重爆から降りて来た操縦者は、同期生だった。他にも四名の同期生がいるとのことだったが、熊校卒業以来の再会にて、その後どうしていた、どうだったと、久し振りで楽

しく語り合った。

彼等は飛行第七十四戦隊と九十五戦隊よりドラッグ、タクロバンの強行着陸の為に差出された重爆隊の操縦者だった。

翌6日は愈々出撃の日である。早朝中隊全員集合の場で、三浦中隊長より「情況から判断して、落下傘降下では不可能であり、強行着陸するしか無い」との決意を示された。我々の間でも、同行の飛行第七十四、九十五の両戦隊が、着陸と決っている以上、強行着陸のことは既に予測しており、覚悟の程は出来ていたので、全員無言の中に之に応じた。

それから二時間程で「四航軍も意見を取入れ、着陸に決定したから、特別攻撃隊としての命名式が行われる」との通達があった。それと共に、飛行第七十四、九十五戦隊の重爆は四機共々タクロバン飛行場へ、三浦中隊の輸送機は全九機共にドラッグ飛行場への強行着陸と計画変更を指示された。

正確な時間は忘れましたが、昼少し過ぎと思う。四航軍の高級参謀が来られ、全員集合の中、特別攻撃隊の命名と同時に恩賜の酒を戴いた。それから急遽、胴体着陸の準備、無線機の取外し等、不要な物の取除きをした。

一戦隊の三個中隊は、当初の計画通

りブラウエン北、南、サンパプロの三飛行場に落下傘兵を降下させ、降下後はリバに帰還する予定だった。

強行着陸と決定してからも、愛機と共に敵中に散る覚悟は出来ていると言うものの、簡単に胴体着陸といっても、必要に迫られての胴体着陸であり、隊員を無事地上に降り立たせる為には、地上に激突するようなことは絶対にあつてはならない。出来得る限り接地のショックを無くし、更に単機と違い編隊の同時突入であるからには、接地後の味方機同士の接触と、火災の発生避ける等々、考えることは一杯ある。爆弾を抱えて敵艦に体当りして、一瞬の中に散華する特攻機とも違い、着陸後の戦闘で、地上戦で、その訓練を重ねて来た斬込み隊員同様に、我々が手榴弾と拳銃一挺で、果して満足に戦えるかの問題がある。

着陸したら敵機を分捕って帰るか、とは操縦者に一縷の希望を持たせる為、義烈空挺隊の訓練の初期に(B29)に對するサイパン攻撃計画の頃)内地で撃墜した機から手に入れた敵機の取扱書を操縦者に勉強させた、というが、それは後のことである。このときも隠密裡に敵の飛行場へ潜入する場合ならばできようが、夢か映画のような話も、待機中の我々の笑い話の中にも

出て来たが。そして、そのような様々な考えが心の中に浮ぶとき、操縦者として、一抹の不安と淋しさのようなものも感じざるを得なかった。出撃直前にして払い去り、これで七十四、九十五戦隊の同期の連中とも、肩を並べてあの世へ行けるぞ、位に思い直し、心中は案外平静でおれた。

定刻、操縦席に着きエンジンを開始している時、挺進兵が乗り込んで来た。彼等は第四聯隊の宮田中隊の者、とのことでしたが、降下の時と違い、落下傘の装着は無く、救命胴衣に手榴弾、拳銃に携行重機と白襪姿だった。

私は中隊長機編隊の二番機として、一戦隊の三コ中隊の編隊に続き離陸した。挺飛一戦隊の輸送機編隊二六機に続き、我々強行着陸の三浦中隊の九機、これも強行着陸の七十四、九十五戦隊の重爆四機と、煙幕展張に任ずる重爆一三機が続いて離陸し、約三〇機の戦闘機が、離陸時の上空を掩護して出撃する様は、久し振りに見る堂々たる威容であった。

ネグロス島バゴロド基地を発進した護衛戦闘機とは、マナブラ上空で合流し、セブ島を越えカモテス海を横切り、レイテ島南端を迂回し、パナオン

島の北端から北上して、各編隊毎に攻撃目標に向って分進する、と知らされていたが、私の機は離陸直後から、右エンジンが滑油洩れをおこし、暫くはそのまま編隊行動をしたが、間もなく右エンジンは停止し、片発飛行となつたため、次第に編隊より遅れ、遂に編隊を離脱せざるを得なくなつてしまつた。

機関係の高橋少尉の「リバの飛行場に着陸しては」との意見もあったが、前方を飛行している大編隊群を見るとくやしくて、またこの輸送機(MC)は、片発でも上昇出来る位の能力は持っているので、単機、編隊のコースを外れ、セブ島を横切らず、ルソン島よりレイテ島南端を目指して、直行する決心をした。幸いに全航路共快晴で、運良くレイテ島南端手前で、編隊の最後部に追いつくことが出来た。

その直後に最初の対空砲火に遭つたが、翼の間をすすると曳光弾が抜ける程度で、別に大したものでは無く、中国大陸で一度撃たれたことがあつたが、その時の程度位の感じだった。その後、一戦隊は左に針路をとり、ブラウエン中飛行場の方向に変針した。

三浦中隊はレイテ湾に入り、高度をぐんぐん下げてドラッグ飛行場方向に

変針する手前で、吉田中尉機の横をすり抜けて、長機編隊の二番機の位置に入ることが出来た。吉田中尉の横を抜けるとき、声は聞える訳ではないが、中尉が「良く来た、良く来た」という表情で、手を振ってくれたことは今でも、はっきりと覚えていいる。その時は間違いなく九機揃っていたが、その直後に猛烈な対空砲火を受けた。

レイテ湾上に出た時は、湾内には数百隻の艦船で埋っていた。静けさそのもので、我が聯合艦隊が湾内に停泊しているのではないかと、錯覚する程だった。

高度一五〇メートルから、沿岸のドラッグ飛行場に向け、降下し乍ら一直線に敵艦隊上空すれすれに突入した。海岸沿いにある対空火器は、一メートル間隔に配列してあるかと思う程の密度で、海上の無数の艦船から、筒のようになつて撃ち上げる砲火は、その艦が真紅に見える程で、機の周りに炸裂する砲弾は眼もくらむばかりだった。三浦中隊は忽ち、被弾し火焰の中に包まれてしまった。

中隊長機は目前で火を発し、私の機も同様右翼を撃ち抜かれて、火を発すると同時に右にそれて海中に墜落したが、他の全機とも、ドラッグを目前にし乍ら海中に飛散したようである。後

からの判断では、長機ともう一機位は、火を吹き乍らも海岸線に着地したのではないかと思う。それは収容所で働くヒリッピン人が、三浦と名前の書かれた飛行靴を履いていたからである。

高橋少尉は、機内でアツという叫びと共に、血達磨となり崩れ落ちました。

私は着水と同時に機から放り出され、海上に漂っていたが、対空砲火で肩と背中を負傷していたので、出血の為意識朦朧として、眠ったり醒めたりしている中に、翌日の午後になり敵の上陸用舟艇に引き上げられ、治療を受けた後収容所に入れられた。

収容所内には、もう一人の生存者がいた。ここでは特に名前は秘させて貰いますが、この人は少飛八期で、七期の小池さんと、私の三人で鈴木隊より三浦隊に増援に行った人だった。あとから二人でいろいろと話し合ったが、ドラッグ飛行場直前の砂浜に不時着したこの人は、拳銃で米軍と応戦し、頭部に銃創を受けて病院に運ばれたが、傷が治ると同時に脱走してドラッグ飛行場に行き、八機の飛行機を機き払い、更にカービン銃を手に入れて米軍の幕舎を襲撃したが、遂に胸部に貫通銃創を受けて、野戦病院に運ばれて、

後にモンテンルパの収容所に送られた。そこで処刑を免れて復員し、現在大阪に住んでおられるので、最近電話をしても連絡が取れないので、承諾なしにこのことを書かせて貰った。この人から聞かれても、私と同じことを話すと思う。名前のことは宜敷しくお願いする。

あとからの話ですが、前記重爆隊の同期生も、タクロバン飛行場直前で被弾し、湾内に着水し生存者は機内より脱出したが、敵の駆逐艦よりの銃撃で落命した。彼も亦拳銃で応戦したが、最後の一発を口に入れて発射したが、奇跡的にも助かり、米軍の手当を受けたあと、収容所に入れられたという。

他の一人の同期生は、同じように艦上よりの銃撃で負傷し、引き上げられた時には既に絶命していたとかで、七年前に墓参してきました。将校、操縦者は重症者以外は、濠州に送られたので、米軍情報によると将校一名、下士官二名というのは、名前も分っているが、ここでも秘しておきます。将校は降下部隊の人で下士官の一人は、前記の敵の飛行場で暴れた人で、もう一人は重爆隊の同期生である。

当時収容所には、海軍の特攻隊の操縦者も一人いたが、この人は体当り寸前に艦の方向を変えられた為に、砲塔

に被いかぶさり、爆発せずに自分は片足を失っていた。私自身は敵側に捕えられ、敵の治療を受け一命をとりとめましたものですが、少しも悔いてはおりません、なぜならば、成功を夢見て全力を尽したので、むしろ誇りに思っている。

以上は滝口氏の述べたことを私が取りまとめたもので、同氏の意に添はない点があれば、それは私の責任である。なお同氏の陳述はまだ続くのであるが、今回は割当紙面の都合もあると聞いているので、続きはまた次号に投稿致します。

挺進飛行第二戦隊三浦中隊名簿

(昭和19年12月6日レイテ島ドラッグ飛行場にて戦死)

- | | | |
|----|-------|-----|
| 大尉 | 三浦 浩 | 出身地 |
| 中尉 | 吉田 憲一 | 岐阜県 |
| 少尉 | 高橋 利春 | 京都市 |
| 准尉 | 甘田 庄一 | 熊本県 |
| 准尉 | 池田 浩三 | 東京都 |
| 准尉 | 井原 常雄 | 岡山県 |
| 曹長 | 今井 久雄 | 三重県 |
| 曹長 | 土井 廣 | 西宮市 |
| 曹長 | 内藤甲子一 | 東京都 |
| 曹長 | 永治 武 | 岐阜県 |
| 軍曹 | 我妻 利尚 | 静岡市 |

敵が使用中のタクロバン飛行場



(計二十八名)

- 軍曹 五十嵐正身 山形市
- 軍曹 鹿野 盛雄 宮城県
- 軍曹 小池 稲夫 長野県
- 軍曹 田村 吉次 東京都
- 軍曹 橋本 敏長 兵庫県
- 伍長 新藤 由三 埼玉県
- 伍長 竹下 勇雄 島根県
- 伍長 米原 達郎 島根県
- 伍長 浜崎 繁雄 広島県
- 曹長 羽田 翠
- 曹長 久部 松次
- 軍曹 望月 郁也
- 氏名不詳
- 氏名不詳
- 氏名不詳
- 氏名不詳
- 氏名不詳

(生存者名)

軍曹 瀧口 泰弘 神戸市
軍曹 (匿名) 大阪府



ドラグにある慰霊碑

アンフェレス発進

三頁に掲げた 短歌二首について

ますらおのかなしきいのちつみかさね
つみかさねまもるやまとしまねを

我々の胸懐に迫ってくるものがある。
この歌の歌碑が、詠者の郷里である山梨県の竜王町山県神社境内にあるというが、一度行ってみたいと思う

花負いて空うちゆかん雲そめん
かばね悔なくわれら散るなり

この歌は特攻隊が次々と出撃していった当時の状況を、髣髴させる歌であるが、実はその頃詠まれたものではない。詠者は三井甲之(明治16年生れ、昭和28年没)という歌人で、昭和2年の作である。その年の8月24日に、駆逐艦蔵が演習中に島根県美保ヶ関沖で沈没し、艦長五十嵐忠佐以下九二名が艦と運命と共にした。その中にこの人の友人の親戚ということでありのあった福田秀穂機関中佐がいた。

「蘇機関長故福田氏をしのびまつる」と題した九首の連作の、末尾の一首がこの歌である。

「ますらお」は「丈夫」とか「益良夫」という字を宛てるやまと言葉である。

万葉集の防人の歌によく出てくるが、国事に身を挺するおのことい意味で、特攻隊員はまさに「ますらお」である。かなしきいのちつみかさねつみかさねまもる」というところが、

昭和19年12月6日、第二挺進団(高千穂部隊)はルソン島アンフェレス飛行場を発進、既に敗色濃いレイテに向ったのであるが、挺進第三聯隊の宿舎にあてられていた南サンフェルナドの精糖工場の壁に、この歌が書き残されていた。輸送機不足のため基地に残され、その後ルソン島で戦い生き残った一兵士が、帰還後この歌を紹介した。

このときレイテのブラウエン北と南及びサンパブロの三飛行場に降下したのは、白井聯隊長以下第三聯隊の主力である。また、ドラグとタクロバンに強行着陸部隊が向ったことは、別橋島山氏の記事の通りである。第三聯隊主力の三百数十名に一人の生還者もないので、詠者は判明しない。

この歌の歌碑はかつての基地である宮崎県の新田原飛行場(現在の航空自衛隊新田原基地)と川南町護国神社境内にある。(田中賢一)

伏竜特攻訓練余話

海底散歩の道連れ

―忙中閑あり地獄の底も―

門 奈 鷹 一 郎

魚の昼寝

私達伏竜特攻隊員は、初期訓練で順調でスムーズな潜水沈降と浮上、及び

海底での自由自在な歩行ができるよう

に、徹底的にたたき込まれた。元來陸

棲動物であるヒトが水中で歩行するの

であるから、たこやかにの真似をする

のは容易なことではなかった。それに

猿回しのエテ公よろしく、船上からの

綱一本の合図で「それ右」「やれ左」

と能のないことを教官が考えたかどう

か分からないが、海底にいる間は比較

的自由な行動が許されていた。

私が初めて潜った海底は、一面の砂

地で、曇天夕暮れの砂漠を思わせる無

味乾燥？ な、全く風情の無い場所

だった。しかし、潜水位置が変わって岩

礁地帯に当たると、そこは一変して美

しい変化に富んだ別世界になるのだっ

た。今でこそカラーテレビで、茶の間で

いながらにして色彩豊かな海底の様子は眺められる。しかし、戦前戦中は、せいぜい理研映画の「千鶴の一日」(モノクロ)などで、潮の引いた岩礁地帯が紹介されていたに過ぎ

なかった。従って、私が初めて目にした海底の岩礁地帯の美しさは、驚異そのものであった。

海底でゆらぐ海草の林、岩間を縫って泳ぐ魚の群、褐色の岩を彩っている緑や黄は、海中の苔なのであろうか……このような海底の景観は、思わず戦

時中の生死を賭けた特攻訓練を忘れさせるパラダイスであった。

たまたまこんな場所で潜水した時、私は驚くべき体験をした。岩間の海草に腰なわをからませぬようにゆっくり歩いてみると、ふと目の前の岩の裂け

目に、青・赤・黄の三原色に彩られた美しい魚が、体を斜めにして横たわっている。約二〇センチほどの魚だが、今考えてみると、ペラの一種類らしい。

この光景を見たたん、私は、あ、魚が岩のすき間にはさまって死んでいる、と思った。それほどその姿は静かであった。

しかし、近寄って目をこらして見ると、ひくひくとかすかに胸びれが動いている。更に体を寄せて手でそっと触れてみる。ひくっと体をふるわせたが逃げ出す様子もない。よし、つかまえてやれ、と指先を腹の辺りの岩のすき間に入れたたん、するりと魚は岩から抜け出して、向こうの海草の陰に逃げて行った。どうやら私は魚の昼寝の邪魔をしてしまったらしい。

私は四十数年昔のこの体験を、何かの折、ふと思い出すことがあった。しかし、その度になぜか昔、夢でも見たことを現実と取り違えているのではな

いか、という疑念を捨てきれなかった。まさか昼日中から海中で魚が昼寝をきめ込むなんて、ちょっと信じられない、多分何かと錯覚していたのだらうと思ったりしていた。ところが、最近になって、中央公論社発行の「続・百魚歳時記」に次の記事が書かれて

いるのを読んで、やっとあれは夢ではなかったのだ、と納得できた。

「……ペラたちはまた面白い習性を持っている。……日暮れが迫って来ると、砂を掘ってさっさと身を横にして早々とお寝みになってしまふ……」

あの日、まだ日暮れには間遠かったが、私と出会ったペラは相当な横着魚

で、砂地に穴を掘るのも面倒と、岩の裂け目をベッドにして体を横たえ、昼寝をきめ込んでいたに違いない。

好奇心の強い魚

私はつい最近まで玄閑の靴箱の上の水槽に、二匹の鮒を飼っていた。約十五センチほどの大きさが、数年前に五センチ足らずのを貰ってきたのが成長したのである。狭いガラスの水槽の中だが、いつも仲良く二匹寄り添っ

て、時にゆっくりと遊泳し、時に水中の哲学者の如く水底に静止し、つづらな瞳をじっと外から覗き込んでいる私に向けている。魚の好きな私は、仕事に疲れると二階から降りて、時の経つのも忘れて水槽のガラス越しに鮒を眺めて楽しむのである。そんなある日、私はふと、海底で逆にガラス越しに私が魚に覗き込まれたことを思い出した。

――敗戦の年、八月初旬、私達の訓練が後期に入り、場所も対潜学校から野比海岸(横須賀)の第二実習場に移ってからのことであった。この後期訓練は、海岸の砂浜から潜水服をつけたまま徒歩で潜る、やや実戦的なものであった。

その日、午後の訓練の時、私は先端にブイがついた腰なわをつけて、一人

で沖へ向かって歩いていて、真夏の太

陽が照りつける海岸は、裸足の裏を焦がさんばかりの熱さで、私達は砂浜を歩く時、この熱砂の海岸にしぶとくはりついでとびとびに生えている青草を、ひろうようにびよんびよん跳びはねながら歩いたものであった。

しかし、海中へ入ると、潜水服と毛糸のシャツを通して、ひんやりとした冷気が肌に心地良い。給気排気をひんばんに行なうと、ボンベ内の酸素消費量が大きくなり、はなはだよろしくないのであるが、炭酸ガス中毒防止と、健康維持のためには、当然ながらこれが最も効果的なのである。それに、酸素を浮上のため使用する必要のない海岸からの徒歩潜水なので、それほど酸素残量の心配をする必要もない。私は必要以上に給排気を繰り返して、「冷房完備・呼吸安全」の真夏の海底歩行を楽しんでいた。

耳がツーンと鳴り始めた時だから、深度が五メートルほどになった頃だろう、前方から私の方へ向かって七、八匹の魚の群がやってきた。それは、いずれも十五、六センチの黒鯛の子に見えた。私は思わず足を止めた。するとこの魚の群は、私の体すれすれに通り過ぎて行った。魚好きの私は、思わず体を回わしてその行方を追ったが、私のかき立ててきた砂煙の中へ彼等は姿

を消して行った。おそろく私の排気の気泡と、水中の濁りを見付けて餌をあさりにやってきた魚の一群だったのだらう。ぐいっと腰の辺りが引かれた。私の動きが中断したので、上から安全確認の合図を送ってきたのだ。「俺はこの通り生きているぜ、せっかくの楽しみを邪魔するな」と短一発(短かく腰なわを引く)を応答して私は前進を再開した。

しばらくすると、先ほどの魚と思われる数匹の群が、背後から私のわきをすり抜けて行った。あ、さっきの連中だなど見送っていると、彼等は再びくるりと向きを変えて私の方へ向かって来る。海中で光る面ガラスが気になるのか、今度は私の顔目がけてぐんぐん接近してきた。再び私は立ち止まった。と、先頭を切って進んでいた奴が、私の面ガラスの前でぴたっと停止した。そして私の顔を、しげしげと

いった様子で覗きこんでいる。「おかしな奴だな? 岩でもなし、草でもなし、と言って俺達の仲間でもなし……」とでも考えているかのようになり、私は思わず独り笑ってしまった。すると、私の顔の動きにつり込まれたか、相手がつと体を進めたため、魚の鼻っ先が面ガラスにぶつかり、驚いた

素ぶりや、魚体をひる返すと沖へ向かって泳ぎ去って行った。

腰がぐいっと引かれる——またまた「安否ヲ問ウ」だ。

「うるさい、俺は今魚と遊んでいるのだ、じゃまするな!」と私は「短一発」の応答をして、しばしば魚群の泳ぎ去った行方を追っていた。

たこ獲り

先にも述べたが、私達の潜水位置が岩礁地帯であれば、水中の自由行動が

ある程度許されているだけに、これは大変楽しい訓練となる。黄褐色や緑の海藻のゆらぐ岩の間を歩いていると、時にごっごつとした岩の一部が動いていることがある。「おや?」と一瞬目を

こらすと、岩の塊りと見えたのは、岩にへばり着いたさざえで、これが餌を求めてか食後の散歩か、自分の家ことゆっくりゆっくり移動しているのだ。それも二〇センチもある大きな奴だ。しめた! とばかり手をのばす



陸軍の飛行機乗り(長谷川理事)に書いてもらった絵、間違ひあれば御免 編者

と、何のことはない、自分の手も巨人の手の如く大きくなっているのだ——面ガラスが水中でレンズの作用をしていたので。潜水かさぎえは何度か獲ったが、あわびには一度もお目にかからなかった。

たこは、岩礁が自然の横穴にえぐれている入口の辺りに、貝殻やかにナキガラが散乱していたら、たいていその中に潜んでいるはずだから……とかねて教員に教えられていた。実際にそれらしき穴を見つけて手を突っ込んでみると、いきなりぐにやりとした手応えがあって、びっくりさせられる。強引に引っぱり出すと、手の甲を吸盤で吸い付かれ、下手してあの鳥口で引っ

かかれたこともあった。たこをつかまえたなら、例の頭(本当は胴)をひっくり返すと、参った、と大人しくなる。そのゆとりの無い時は、上手に潜水服の胸の辺りに吸い着かせ、軽く押さえて浮上する、同行二人は確実な運搬法であった。

当時この辺りで行われていたたこ漁は、「たこ壺」(堅い素焼の、たたきつければ壊れる奴で、下世話に「名器」だ何だと言われるソレではない(為念))を、柿渋を塗ったしゆる縄につつましい数を一連にくくりつけ、手漕ぎの舟に積み込んで、昼のうちに岩礁地

帯の海底に沈めてくるのである。たこは、今宵の宿りはこと、寝心地の良いや壺の中にもぐり込み、翌朝目覚めた時は漁師の舟の中、ということになるのである。

戦争直後、三浦半島のさびれた漁村に行くくと、ふじつばのいっばい着いた、色あせたたこ壺が、漁師の苦屋の軒下に転がっていて、海辺の一点景として風情をそえたものである。

ところが最近のたこ漁ときたら、コンクリート製で、長さが四〇センチほどのかまぼこ形の容器に、落し蓋の装置のある箱を使用している。中に仕掛けられた餌のいわしに誘われて入ったたこがこの餌にしがみついたとたん、すくと入口がふさがるといった、味も素っ気もない代物である。これを何十個とナイロンロープでつなぎ合わせ、「魚探」のついた快速船で海底の模様を探りながら放り込んでくるのである。獲るためには手段を選ばないといった感じむき出しのもの、自然界の人と動物の相互関係を、人間のエゴでぶち壊すルール違反の漁法と感ずるのは、古い型の人間に属する私の目が、であるうか?

ところで、私達が前期訓練を行った浦賀沖でも、地元漁師がたこ壺を沈めて漁を行っていた。たまたま潜水中

にこのたこ壺に遭遇すると、……という事になって、潜水者は見事なたこを獲って浮上してくる——浦賀の漁師さん申訳ありません。

獲ってきたたこは、船上で生のまま刻まれ、酢だこにして私達の腹中に納まるのである。

「酢はどうしたのかわって？」なに、そのため各船には必ず酢が用意されているではないか。(注)また隊へ持ち帰り、海水を煮て製塩作業をしている定員(一般水兵)のところへ持って行き、「足を一本やるから……」とゆでだこにして食ったこともあった。

(注) 私達の使用した簡易潜水器には、空気を清浄するため清浄缶という、うすい金属製の箱が所り付けられていた。この中に詰められている苛性ソーダが、缶の破損で浸入した海水と化学反応をおこして口元へ逆流してることがある。万一これを呑んだ場合に備え、事故者に中和のため飲ませる食用酢が常備されていた。

「貴様は馬鹿か？」

——水中会話の想い出——

私達の使用した簡易潜水器の仕様に「……本潜水器ハ背負ヘル空気清浄缶ニ依リ距離六米以内互ニ背ヲ向ヒ合セル場合其他ノ場合ハ約三米ノ通話容易ニシテ……」となっていた。教員か

らも、「背中の清浄缶を相互に密着させると、水中で会話ができることになっている」と聞かされていた。しかし、これを実際に試みる機会はなかなか得られなかったが、野比の実習場に移ってから間もなく、やっとその機会が訪れた。

その日はS上飛とベアを組んで潜水する予定であった。Sは新潟県出身で、第一岡崎航空隊の整備予科練から来た男で、年齢は私より上だったが、まじめで大変重厚な人物であった。なぜか私とウマが合うらしく、北京出身の私によく中国の話の聞き手がたりした。入隊前は杜司(酒造り職人)をしながら予科練受験の勉強をしていた、という努力家でもあった。

私は水中会話ができる、という教員の話半信半疑で聞いていた。しかし、私達の訓練はいつも五人一組で潜水し、水中展開、浮上、沈降といった場合が多く、二人で背中合わせの会話を試みることはできなかった。しかし、今日は二人一組で潜水し、深度五メートルで交互に浮上沈降を繰り返すという訓練が行われることになった。よし、今日こそチャンスと、私は潜水前にS上飛に水中会話の件を打ち明け、合図するから背中合わせで会話をしようと打合わせしておいた。

私が先頭、Sが続いた。浮標の付いている腰なわの伸び具合で、深度おおよそ五、六メートルと思われる地点に來た時、私はふり返って（実際には体を一八〇度回して）Sを見た。Sは片手を上げた。私は潜水かぶとの呼吸排出口（つまり口元）の辺りで、人差指と拇指の先をつけたり離したりして、会話の手まねをした。Sが指で円を作って了解の合図を返してきた。

私達はお互いに接近して背中合わせとなった。清浄缶取付バンドが触れるゴソゴソした音がかぶと内に伝わってくる。私はふといたずら心を起こして言った。

「貴様は馬鹿か？」

「ウホへ……ス……ゴモ……」何か音といった感じの響きが私のかぶとの中に伝わってきたが、Sの返事は、言葉とはとても言えたものではなかった。無口な相撲取りがインタビュアーに答えているよりもまだ不明瞭な音しか聞こえてこなかった。

「何言ってるんだ、日本語で言え日本語で」

私の言葉に先ほどよりも大きな音声がSから返ってきたが、やはり何を言ってるのかは全く不明だった。

潜水終了後、私はSに言った。

「S、俺の言った言葉分かったか？」

「いや、何か良く分かりませんが、バなんとか、音みたいなのは二度ほど聞こえました」

「そうか、俺はやっぱり日本語の話し方下手なのだ、北京に長くいたから……Sが俺に言った、貴様は馬鹿か」という言葉ははっきり分かったのだが……」

「門奈さん、それはひどい！ 私は聞こえますが、聞こえますか」と言ったんですよ、本当ですよ」

真面目なS上飛がむきになって弁解するのがおかしくなって、私は吹き出しながら言った。

「嘘だ、嘘だ。俺もSの言葉はさっぱり分からなかったよ。やっぱり手先信号しかないな、水の中は……」

海岸に張られた天幕の中で、潜水服を脱ぎながら、私達は一分からん、分かん」をくり返しながら、無事潜水を終了したのを喜ぶかのように大笑いした。

昭和二十年八月初旬、伏竜特攻訓練たけなわの海辺で得た和やかな一時であった。

投稿募集 特攻隊に関係ある各会で慰霊祭を行ったら、必ず投稿して下さい。また、このような訓練秘話も歓迎します

特攻隊戦没者合同慰霊祭予告

3月24日同封案内の通り実施します。奮って御参加下さい

貴様と俺とは

同期の桜

はなればなれに

散らうとも

花の都は

靖国神社

庭のこずえで

咲いて会およ



遊就館にある特攻戦士の像

石腸隊始末記

安部喜久雄

昭和19年10月20日 マッカーサーが、フィリッピン群島の一角「レイテ島」に反攻上陸を開始した。大本営は「捷号作戦」を発動、レイテを決戦場「天王山」と呼称し、陸海の総力を結集して米進攻軍の撃滅を期した。

海軍第1航空艦隊司令長官大西瀧治郎中将は、連合艦隊主力のレイテ突入を成功させる方策は、最早「体当り攻撃」によるしかない、特攻を決意した。

奇しくも同じ10月20日 陸軍中央部は銚田教導飛行師団（軽爆）に対して、九九式双発軽爆機（500疋弾装着）をもってする「体当り攻撃隊」の編成を下令した。跳弾艦船攻撃の第一人者であった若本益臣大尉（陸士53期）を隊長に陸軍最初の特別攻撃隊「萬葉隊」一六名が選ばれて、26日にはルソン島南部の「リバ飛行場」に前進した。

次いで浜松教導飛行師団（重爆）で、西尾常三郎少佐（陸士50期）以下二六名が選ばれて、最新鋭四式重爆機（800疋弾装着）の「富嶽隊」が編成

され、26日にルソン島中部の「クラーク飛行場」に進出し、その威容は四圍を圧した。

10月25日 大和・武蔵をはじめ戦艦九、重巡一三、空母四を基幹とする連合艦隊の「乾坤一擲」のレイテ湾殴り込み」に呼応して、神風特別攻撃隊が敵空母を捕捉突撃して赫々たる戦果を挙げた。

11月2日 神風特攻隊の輝かしく悲壮な戦果が大本営から発表された。その日、陸軍中央部は明野（単）、常陸（単）、銚田（99襲撃）、下志津（99軍偵）等の六教導飛行師団に対して、「八紘」六ヶ隊の特攻隊編成を示達した。戦勢を挽回し戦局を打開する戦法は「特別攻撃のほかない」と、決死でなくて必死の非道な決定を下した。

（註） 参謀本部内では19年春頃から「体当り戦法」が秘かに企図されておった。

下志津教導飛行師団第三飛行隊（銚子飛行場）で、九九式軍偵兼襲撃機（500疋弾装着）一八機の「八紘第六隊」が編成されることになった。

11月5日 教官高石邦雄大尉（陸士54期）を隊長に一八名が選ばれた。19年春航空士官学校を卒業して引続き下志津飛行学校乙種学生（操縦課程・六ヶ月）を終了したばかりの57期少尉全

員一四名に、教官、助教の四名が加えられたのである。航空廠から受領した新機の点検及び試験飛行も僅か二日間、出発を急がれての慌ただしい出陣であった。

11月8日 銚子の空は曇り、飛行場を吹き渡る海風が肌に冷たく感じられる日、訣別を終えた若武者達は万感を胸に秘め差雨として機上の人となる。

河村隊長以下教官、助教、整備員が手を打ち振り、学徒動員の女子挺身隊員（銚子高女生）は涙ながらに白鉢巻を振って還らぬ征途を送った。

出発直後からエンジンの不調が絶えず、やむを得ず数機隊に分かれて、浜松・加古川・都城・知覧・伊江島・石垣島等に不時着陸して、一式双練で同行した南初一曹長以下の熟練整備員による献身的な徹夜の点検補修に支えられながら、12日、台湾東岸の花蓮港飛行場に辿り着いた。13・14日は後続編隊を待ちながら最後の点検整備。束の間「祖国との別れ」を惜しんだ。

15日、台東飛行場へ前進して山間の鄙びた温泉宿で最後の宴。高石大尉が肌身離さず携えてきた尺八の蕭条たる音色に涙した。

11月16日 暁闇をついて離陸、敵艦載機グラマンの跳梁を避けて早朝にバシー海峡を越え、ルソン島中部の「デ

ルカルメン飛行場群」に全機無事に到着した。

11月19日 護衛兵を従えて陸路を自動車にて約100軒南のマニラに赴き、第4航空軍司令官富永恭次中将に申告してその指導下に入り、石腸隊と命名された。マニラでの一夜の歓迎宴が今生最後の美酒、美肴となった。

（註） 一、私は同行誘導の任を終えて11月23日に遺影を撮り、遺品等を預かって帰国したので、以下は文献に拠る。

二、石腸隊主力は、レイテ出撃のため、「ネグロス島バコロド」に前進した。バコロド——レイテ島は約250軒である。

12月5日 早朝、偵察機がレイテ島「タクロバン」東南スリガオ海峡を西北進中の巡洋艦一、駆逐艦一五に護衛された約五〇隻の輸送船団を発見した。

石腸隊高石邦雄隊長が卒先指揮する。市原哲雄少尉・大井隆夫少尉・片岡正光少尉・下柳田弘少尉・山浦豊少尉・増田憲一少尉の七機が出撃。海軍聖武隊二名、陸軍一宇隊三名と共に敵を捕捉突入した。

12月8日 敵は早くもレイテ島西岸の「オルモック湾」まで進攻して我が地上軍の腹背に迫った。陸海航空部隊

は全力を挙げて第35軍(16師団、1師団、26師団、68旅団)の危急を救うべく、海軍三三三、陸軍二一名と伊藤蒼昌少尉機が突入して大なる戦果をおさめ、オルモック湾から数日間敵艦船の姿が消えた。

12月12日 陸軍ではやっと整備し終えた僅か三機だけで、オルモック湾内「パイパイ沖」の艦船群に突入した。石腸隊の井樋太郎少尉機と八絃隊単一機、丹心隊単一機であった。

オルモック港も敵手に落ち、レイテ島唯一の後方補給基地を失って地上作戦は絶望となった。

(註) マニラ港——オルモック港は約400海里(700軒)である。

12月15日 敵がマニラの南方約250軒のミンドロ島「サン・ホセ港」付近に上陸して、海上補給路を断たれたレイテ決戦の継続は不可能に陥った。大本営は作戦の重点をルソン島防衛に変更し、第14方面軍司令官(フィリップ方面最高指揮官)山下奉文大將は、19日レイテ決戦を打ち切り、ルソン島における持久作戦を決定した。

12月22日 第4航空軍によるサン・ホセ方面への攻撃が続行された。石腸隊の安達貢少尉機が、殉義隊の単一二機と共に同方面の敵艦船に突入した。

20年1月5日 誠司偵隊(下志津教

導師団で応急編成。隊長伊藤哲太郎大尉・陸士53期)の百式司偵機が、ルソン島西方海域を北進する空母22を含む600余隻の大艦船群を発見し、「リングエン湾」への本格的上陸と判断された。

石腸隊副隊長細田吉夫中尉機・林甲子郎少尉機・杉町研介少尉機と一誠隊の単三機・進襲隊の襲撃機七機が突入した。海軍の零戦、艦爆も同時に殺到した。

1月6日 敵はリングエン湾に進入し上陸を開始した。

石腸隊の岡上直喜少尉機が、鉄心隊・旭光隊・皇華隊・皇魂隊の四機と共に突入に成功した。海軍も三四名が突入し、敵はそのすさまじい肉弾攻撃に恐怖したと記されている。

1月8日 上野哲弥少尉機・鈴木敏治少尉機と時田芳造曹長機が払暁に出撃し、石腸隊の最後を飾ってリングエン湾内の敵艦船突入に成功した。陸軍一四名、海軍三名であった。

9日、10日、12日、13日と陸海軍はともに残存全機をもって特攻を敢行した。

フィリップン作戦における特攻未帰還機は海軍三三三三機、陸軍二〇二機の五三五機であった。米海軍誌による損害は、空母撃沈二、撃破一八、戦艦撃

破五、巡洋艦撃破八、駆逐艦撃沈三、撃破二二、上陸用舟艇撃沈一四で、総計は撃沈一九、撃破五三の七二隻であるから、特攻機八機をもって一隻を撃破したことになる。

米海軍に所属しない米陸軍輸送船の損害を含めると、その戦果はさらに多く輝かしいものである。

(註) 特攻機には数名が搭乗した大型機もあるので、機数のほか人数を記した。



特攻隊員として散華した兄は文学を愛する青年だった

昨年9月23日に行はれた世田谷特攻観音の年次法要で、遺族代表曾我睦郎氏の捧げた追悼文の一節、

(兄曾我邦夫は)富嶽特別攻撃隊員として、昭和20年1月10日リングエン湾で散華いたしました。兄は烈しさの反面文学を愛しくラシック音楽に親しむ優しい一面があり、戦場からの数通の便りにも自然に対する細やかな観察や表現が見られたものです。その兄達が皇国のため命を決して後に続く者を信じ敢然として死地に赴いたことは、今思うに肅然として冷を正さしむるものがあります……

昭和天皇独白録より 特攻関係記事を拾う

鈴木瞭五郎

一、特攻については、昭和19年10月25日のいわゆる「神風特別攻撃隊」の第一弾が実行され、その報告を聞いたときの天皇の言葉がすべてをあらわしている。「号令台に上って中島中佐はこの電文を読み上げた。『天皇陛下は神風攻撃隊の奮戦を聞きし召されて、軍令部総長にたいし次のようなお言葉をたまわった』そのようにまでせねばならなかったか、しかしよくやった」と。

二、沖繩作戦の敗因

所謂特攻作戦も行ったが、天候が悪く、弾薬はなく、飛行機も良いものもなく、たとえ天候が幸いしても駄目だったのではないかと思う。特攻作戦というものは、実に情において忍びないものがある。敢て之をせざるを得ざる処に無理があった。

(所感——特攻作戦に対する天皇の御正観をここに知る。特攻烈士の英霊の心安まらん。)

伏竜特攻隊員の像

奉納にあたって

昭和20年2月連合軍の本土上陸作戦を水際に撃破する目的をもって、海軍工作学校潜水登大尉以下10名のスタッフにより、簡易潜水器が開発研究されました。

同年5月海軍最後の特攻「伏竜」として、制式兵器に採用され、横鎮に第71突撃隊、呉鎮に第81突撃隊、佐鎮に川棚突撃隊が編成されました。久里浜の海軍工作学校を中心に各地での猛訓練が開始されましたが、隊によっては尊い殉職者を出しております。

一たび水中で事故が発生しますと、直ちに死につながると言う危険な訓練でしたが、幸いにも実戦に至らず終戦を迎えました。

潜水服に簡易潜水器として、酸素ボンベ2本、苛性ソーダによる空気清浄装置などを背負い、攻撃兵器としては5式撃雷をつけた竹竿（通称棒機雷）を持ち、海底に50米間隔に展開、頭上を通過する上陸用舟艇を棒機雷で爆破、自爆すると言う必死の戦法でした。

ました。

海軍部内でもごく一部にしか知られておりませんでした。この伏竜特攻隊を広く知っていただくと共に、殉職者の慰霊を併せ、この事実を後世に残したい、との気運が元隊員の中に起

り、平成2年1月藤木伏竜会会長を始めとして発起人が相集まり、この像を製作、奉納することを決定しました。

製作委員長に3期兵科予備学生出身の元中隊長三宅壽一、事務局長に同期の元中隊長太田幾太郎が選ばれました。

募金にあたっては、特攻隊慰霊顕彰会を始めとして、海軍予備学生、元隊員、その他の方々より絶大なご支援をいただき、目標額を上廻るご協力を賜りました。

像の製作については、模型製作において斯界の第一人者であり、乙22期予科練出身者の小林武氏に委嘱、同氏が心血を注ぎ、立派な像が作られました。像は実物の約二分の一で、海底に展開待機する姿を忠実に再現したものであります。

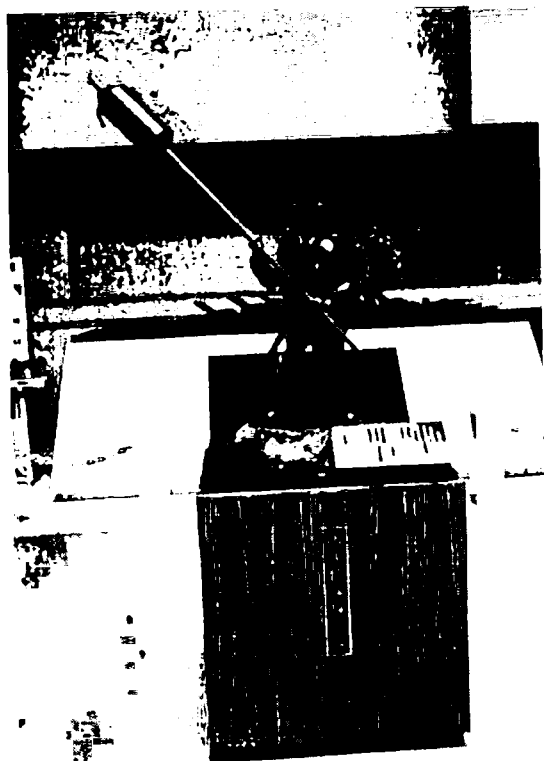
この作戦には、指

揮官として、海兵及び予備学生出身者が、隊員には16〜7歳を中心とした飛行予科練學生が選ばれ

本年8月11日靖国神社に於て特攻隊慰霊顕彰会より寺崎副会長、鈴木理事長、最上副理事長をお迎えして慰霊祭を、引き続き遊就館にて奉納除幕式を無事終了することができました。式後の直会席上で寺崎副会長よりご懇篤なご挨拶を賜わり、続いて鈴木理事長より、伏竜のような特攻隊のあったことを戦後になって知り、この像の奉納により全特攻隊がそろって遊就館に展示された、とのお言葉をいただき、発起人を始め関係者一同大変感激致しました。

靖国神社へご参拝の折には「伏竜特攻隊員の像」を是非ご覧いただければ幸甚に存じます。最後に今回この像の製作並びに遊就館への奉納展示に当り、特攻隊慰霊顕彰会よりの、心からなりますご援助、ご指導をいただきましたことを深く感謝申し上げます、お礼とご報告とさせていただきます。

（像製作事務局長 太田幾太郎記）



特攻隊員の遺族に送る

録音テープ

飯田 佐次郎

渡辺さんの弟浦田六郎少尉は富嶽特攻隊の第一陣出撃で昭和19年11月7日比島方面で特攻戦死致しました。弟思いの渡辺さんは、大阪箕面から上京して慰霊祭に参列していたのですが、今年の一月頃から目が大変悪くなって手紙が読めなくなりましたので、私は電話で特攻観音の法要の模様や富嶽隊遺族の近況を知らせておりました。

其の後私の声をラジカセのテープに録音して送りましたら大変喜ばれました。そこで、特攻隊に関心を持っております横山さんから俳句や短歌を沢山頂いておられますので、その中から選び出し録音しようと思つて書いた原稿がこれでありませう。

声の便り

渡辺さんお元気な毎日の事とお喜び申しあげます。この前に11月10日浜松航空隊南基地の慰霊祭で、遺族代表で

私を読みました遺悼の辞をカセットテープで送くりましたら、自分も慰霊祭に参加した様になりまして、大変喜んで頂きました。

私の家の近くにお住いの奥様が横山栄子さんは、私の弟西尾常三郎が富嶽特攻隊長で戦死した事を悼んで下さいました。常三郎が拝受した功二級金鷄勲章と勲記、外遺品、富嶽隊員の写真を靖國神社に献納して、今は遊就館に展示されている事をお話したら、早速靖國神社にお詣りしてから遊就館に入つて九号室の特別攻撃隊の遺品、遺影を見て頂きました。又陸軍士官学校の同期生の方が、館山市国分寺の常三郎の墓参をして頂きましたので、お話ししたら横山さんも館山迄行って国分寺のお墓にお参りして下さいました。

横山さんは靖國神社へのお詣りの感激を俳句や短歌に書いて頂きましたり、又国分寺の墓参の思出を書いて頂いておりました。横山さんは特に俳句歴も長い由で四季折々の句も沢山頂きましたので、この俳句と短歌を帙に纏めて書いて頂きましたら三冊になりました。この中から特別特攻隊や西尾常

三郎に係る俳句と短歌を読みます。靖國神社にお詣りして

仰ぎ見る千木鱈木の若葉かな
 神の庭万葉の桜咲きにけり
 青春の命あとなし神の庭
 慟哭の涙しみ入る若葉雨
 遺芳数々その勲の花の風
 特攻の花の命の惜しまるる
 もののふの勲高し花悲し
 万葉なる桜が誘ふ涙かな
 日本の後楯となりし神の花
 慟哭の涙も潤るる花の雨
 還ります日無き神の花万葉
 館山市の国分寺のお墓にお参して
 軍神の魂とも思ふ梅の花
 故郷の土にしづまる梅の風
 軍神のお墓近くだれ梅
 殉風の命尊し梅の花
 梅の花古き聖武の寺の跡
 特別攻撃隊を思ふ歌
 大君の辺にこそ征きて砕け散る
 空染めなせし若き武士
 其の命玉とくだけで神さりし
 人尊くも忘ることなし
 特攻の翼にかけて戦場に
 玉と散りける花の御命
 すさまじき闘魂秘めて空染めし
 神々の果て思ふだにつらき
 母君を思ふ心の温りを
 辞世に残さる命尊き

館山に鎮り給ふ軍神の
 母と共なる温りの日々
 打ち返す波静かなる安房の辺に
 君安らかに鎮りてませ

特攻の若きを率いて天翔けし
 花の命の惜しくもある哉
 富嶽なる石に天翔し武士の
 金鷄勲章眼の痛き
 青春の命甲斐なく戦場に
 玉と砕けし西尾大佐は
 国思ふばかりに征きて靖國の
 神と鎮まる御魂を悲し
 恩愛の絆を断ちて征き征きし
 還る日の無き歳月長し
 國の為御楯となりし神々に
 今ある幸を如何に告げなん
 歌も大分読みましたが未だ沢山あります。横山さんは古稀はすぎているが大変お元気に毎日をすごしておられます。最近の句を頂きましたのに
 紅葉旅余生の幸せ高らかに
 渡辺さん、お目が不自由でお困りのことも沢山あると存じますが、くじけずに元気で暮しの程お祈り申し上げます。さよなら。



徳山市回天例大祭参列記

副会長 寺崎隆治

私は昨年(平成2年)11月20日徳山市大津島における回天顕彰会主催の例大祭に竹田恒徳会長代理として参列いたしました。この日は今より丁度四七年前の昭和19年、伊36、47号潜水艦に搭載の回天(人間魚雷)が米国大艦隊在泊のウルシーを奇襲し、大型油槽艦ミシネ号を轟沈、黒煙天に沖し、敵艦隊の心胆を寒からしめた日であり、毎年この日に式典が挙行されています。

式典委員長山本昌己氏(回天顕彰会々長)をはじめ、会員、遺族、山口県知事、徳山市長、市会議長、国會議員、陸海空自衛隊員、儀仗隊、関係団体等約三百名参列しました。委員長、参列者代表が追悼の辞を述べ、儀仗隊が敬礼、遺族代表が感謝の挨拶を述べ直会があり、厳肅盛大な式典を終りました。私は竹田会長代理として約十分間左記要旨の追悼の辞を述べました。

「今次大東悪戦争開戦の初期、わが陸海軍は赫々たる武功を樹てましたが、ミッドウエー海戦以後、戦局逆転

し、昭和18年2月ガダルカナル撤退、4月18日山本元帥戦死など、戦争の前途楽観を許さざるものがありました。そこで当時二十三歳の黒木中尉、仁科少尉はこの戦局を打開するには、人間魚雷回天による必死必殺の体当り戦法のほかなしと確信、二丈余の血書と回天計画図を携へ、一週間、熱誠をもって中央当局にひざづめ嘆願をなし、遂にこれを實現しました。

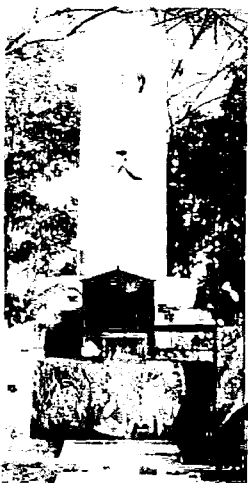
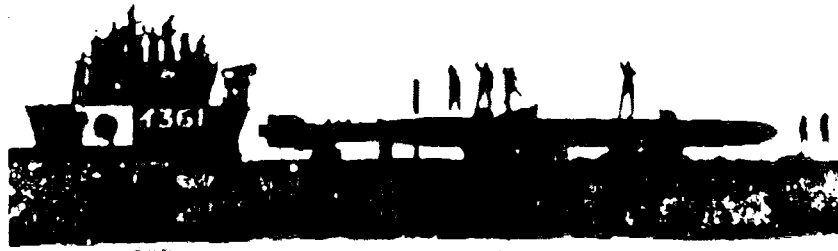
昭和19年11月20日ウルシー奇襲を皮切りに、アドミラルティ、ホーランジア、グアム、硫黄島、沖繩等の海域に行動し戦果をあげました。昭和20年4月以後は洋上作戦に切り替え、回天搭載艦伊58潜水艦(艦長橋本以行中佐、現在京都梅宮大社宮司)はグアム、レーテ線とパラオ、沖繩線の交叉点附近に進出、7月28日米国駆逐艦、タンカーを、同29日大巡インディアナポリス(終戦直前、広島と長崎に投下した原爆をサンフランシスコからB-29基地テニアンへ輸送したのち、レーテに向け航行中)を轟沈、乗組一、二〇〇名中九〇〇名戦死の偉功を樹てた。

今次大戦中の回天特攻隊員は約二〇〇〇名、潜水艦一五隻に乗り三一回の奇襲作戦を執行、その八隻が沈没、特攻隊員一四五名が散華し、黒木大尉(少佐に進級)以下一七名が猛訓練中

殉職された。

終戦直後、日本の軍使が連絡要務のためマニラのマッカーサー司令部に飛んだとき、参謀長サザランド中将は開口一番「回天搭載の潜水艦は何隻あるか」ときかれ「まだ一〇隻ぐらいある」と答へたところ「それは大へんだ、すぐ戦闘行動をやめるよう指令された」といわれた。いかに米国が回天攻撃を懼れていたかがわかります。

祖国日本の危急存亡のとき、特攻隊員は何れも一五歳より二〇歳の若者で父母兄弟など肉親への愛着を断ち切り、祖国に身を捧げられたことは真に至純至高の愛国心の発露であり、永遠に日本国民の胸に血に生き、また世界の人々に感銘を与へ、戦争の抑止力となり、世界平和と繁栄に貢献するものと思えます(附記)徳山市大津島には昭和36年回天慰霊碑が建てられ、43年は回天記念館(遺書、写真、資料、回天の実物等約一千点展示)が設立され、徳山駅の南口から棧橋まで二分、棧橋から巡航船で四〇分です。山口県の歴史記念物とされており参拝参観をおすすめいたします。



特攻第一号

岩佐中佐五十回忌慰霊祭

上坂 康

大東亜戦争の開戦へき頭、ハワイの真珠湾を攻撃した特別攻撃隊の指揮官岩佐直治海軍中佐（海兵65期）の50回忌慰霊祭が、平成2年12月8日、群馬県前橋市の松竹院（曹洞宗）において、約百二十名が参列して挙行された。

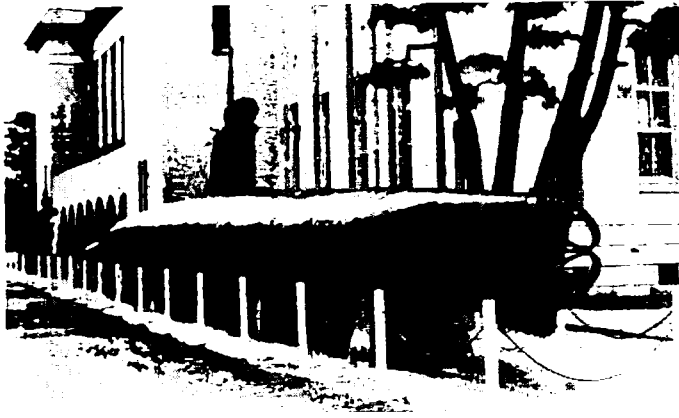
「身はたとえ異境の海に果つるとも護らで止まじ大和皇國を」との辞世を残して、27歳を最期に散華された中佐は、九軍神の一柱として国民尊崇的となり、戦時中は墓前に花や線香の絶えることがなかった。戦後は、岩佐家の親族だけでとむらってきたが、50回忌にあたり、中佐の遺徳を顕彰し、特攻第一号としての偉業を後世に伝えるため、群馬県江田島会、県立前橋中学校互助会（同級会）及び特潜会の各会長が発起人代表となって開催された。

夫氏（特潜会事務局長）及び酒巻和男氏（海兵68期、特潜会）が、約30分ずつ懐旧談を述べられ、続いて上坂が「特別攻撃隊」と「軍神岩佐中佐」という当時の歌を独唱して霊前に捧げた。

その後の会食における池田一等陸佐（群馬地連部長）、寺崎隆治氏（特攻慰霊顕彰会副会長）、船津信章氏（中佐



岩佐中佐の霊前で懐旧談にふける酒巻和男元少尉（特別攻撃隊5隻10名の一員であったが、失神して米軍に収容され捕虜第1号となった。）



の小学校時代の剣道の先生）などの座談も有益であり、参会者一同感銘を深くし、ご遺族にも喜んでいただけ、極めて有意義な慰霊祭であった。なお、TBSテレビ、毎日新聞、上毛新聞等が取材して報道した。

真珠湾を攻撃した特殊潜航艇（甲標的、二人乗り）（米軍から返還されて、江田島で保管されている。）

特攻隊慰霊顕彰会

入会のお願ひ

特攻隊慰霊顕彰会
事務局長 最上貞雄

別掲の如き経緯で、特攻隊慰霊顕彰会が発足しましたが、昨年の理事会で皆様のご了承をいただき、昨年より年会費をいただくことになりました。

毎年3月末に行われる靖国神社での合同慰霊祭の後と、9月23日世田谷山観音寺で執り行われる年次法要の後と、年2回会報「特攻」を発行しております。

戦没特攻隊員にまつわるエピソードを始めとして、全国各地で執り行われる慰霊祭の様様、会員相互の連絡記事等を掲載致す会報を、会員の皆様にお送り致します。

年会費は、僅か一、〇〇〇円でございますので、多くの方々が会員になっていただくことをお願い申し上げます。

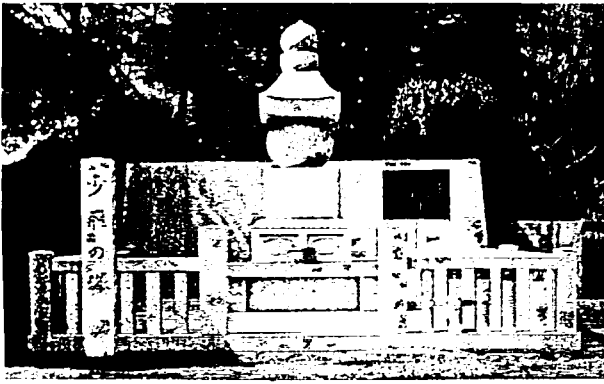
- 年会費の振込先（郵便振込み）
- 口座番号 東京4-59580
- 口座名 特攻隊慰霊顕彰会

「少飛の塔」・点眼・落慶・慰霊祭

少飛三期生 佐藤 彰 平

祖国危急存亡の秋に、年若く燃えて
困難に殉じて行った陸軍少年飛行兵戦
没者は、その数四千五百余柱に及びま
した。

そして、その戦没者の中には、特別
攻撃隊員として散華した第一期生から



第十五期生迄の特攻
戦死者、四百五十余

霊祭を挙行し、英霊のご冥福をお祈り
致しました。

鷺が巣立った。

柱の御霊も含まれて
おります。世の汚れ
も知らず、花の蕾も
まま散って行った特
攻散華の最年少者

当日は拭ったような秋晴れの日で、
全国から千三百名を超す戦友、遺族、
ゆかりの方々がご参集下され、新しい
「少飛の塔」に鎮座された少飛の英霊
の遺勳と偉業を偲んで、お祈りをして
下さいました。

陸軍航空の操縦・通信・整備の中堅
として支那事変・ノモンハン事変を経
て、大東亜戦争に参加、日本の危急存
亡に際して北に南に空の第一線に生命
を賭して活躍した。

は、第十五期生の満十七歳五ヶ月の若
桜でありました。

昭和38年11月に、最初の少飛慰霊碑
を建立した時、皇后陛下（現在の皇太
后陛下）より賜った御歌

やすらかにねむれとぞ思ふ君の
ため命ささげしますらおのとも

そして、四百五十余柱の特別攻撃隊
員をはじめ、四千五百余柱の若鷺が祖
国の安泰と繁栄を念じつつ大空に散華
した。いまだ十代の紅顔の少年達で
あった。

戦後、昭和38年11月24日、生き残っ
た少年飛行兵出身者が相計り、か
つて若鷺の揺籃の地であった、東京都
下武蔵村山に在った東京陸軍少年飛行
兵学校の跡地に、陸軍少年飛行兵戦没

の御歌の碑も、新しい「少飛の塔」
の壁面に嵌入して、英霊の栄誉を顕彰
してあります。

昭和三十八年、東京陸軍少年飛行兵
学校の跡地に、慰霊碑を建立し以後毎
年現地において生存者相集い慰霊の誠
を捧げて来たが、このたび永代にわた
る供養を念願し、ゆかりの人々の加護
のもとに、この地に供養塔を建立する
ことになった。

者慰霊碑を建立し、毎年秋には、八百
名を超すゆかりの人達が集って、盛大
な慰霊祭を行っておりましたが、時移
り慰霊碑の周辺は都市化の波に押され
て市街地となり、更には、慰霊奉賛を
行って来た少飛の出身者達も高齢の域

そして、同じ壁面の端に嵌入してあ
る建立の趣旨の碑文を掲載して、ご参
考と致します。

遷座にあたり、英霊の遺勳を偲び、
久遠の平和を祈るものである。

に入り、将来永劫に英霊のご供養を継
続する方策を勘案した結果、同じ武蔵
村山市に在り、開山以来六百五十余年
の歴史と由緒ある岸清山淨昌寺のご好
意を得て、同寺境内に新しい供養塔を
建立し、これを「少飛の塔」と命名

陸軍航空の拡充要請により、昭和十
三年村山に、東京陸軍航空学校が創立
され第六期生が入校、さらに大津、大
分に陸軍少年飛行兵学校が、また急速
養成のため各地に教育隊が設立され、
終戦時の第二十期生まで四万六千の若

平成二年十月十日
陸軍少年飛行兵出身者一同

し、平成2年10月10日を下して、除幕
・点眼の儀式を行い、少飛英霊四千五
百余柱の遷座に引続き、第二十八回慰

建 立 の 趣 旨

陸軍少年飛行兵出身者一同



幹候9期菊池会

慰霊祭を執行

昭和18年11月1日付、甲種幹部候補生（操縦）として、太刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊に入校した同期は二五〇名。

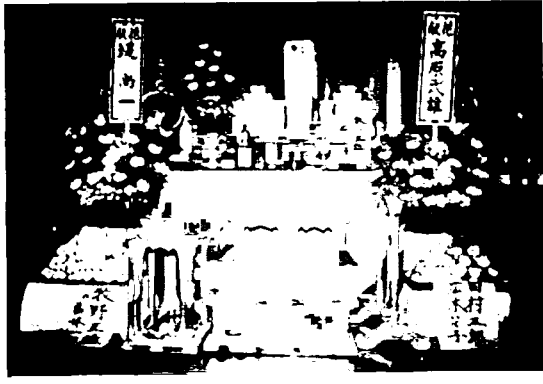
その中で、特攻三六柱、戦死、殉職四二柱、病没二六柱。教官、助教の特攻二柱、戦死、殉職八柱、病没二柱、併せて、一一六柱の慰霊祭を、菊池会独自で行うようになってから四年目となる。

本年は第七回菊池会を富山県宇奈月温泉で行うに先立ち、宇奈月温泉樹徳寺に於て、仏式により慰霊祭を行った。

ご遺族として、昭和19年12月7日一式戦車で、マリキナを飛び立ち、15時30分オルモック湾のアメリカ艦船に突入散華した牧野顕吉君の兄牧野正雄氏、小樽高商時代の学友で、牧野顕吉君の慰霊顕彰に尽力されている中島泰明氏。20年4月22日知覧を飛び立って、沖縄に突入した第百五振武隊林義則君のご遺族小栗楓子さん。20年4月13日第二百四十六戦隊員として大坂上空にて散華した高原啓英君のご遺族藤森政子さん等が参加された。

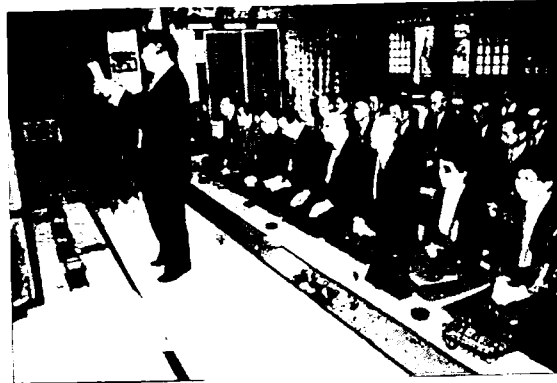
宇奈月温泉は、牧野顕吉君の故郷黒部市に近いこともあり、また生前彼がNHKを通じ江差追分をうたって別れの言葉を結んだ因縁もあり、焼香が始まるころ、江差町江差追分会の監修「江差追分名演集」の前唄本唄後唄をカセットテープで流した。

比島ドウマゲテ飛行場第三十一教育飛行隊で牧野君と一緒に参加者飯田定太郎、藪崎勝雄、内藤益一郎、毛馬内誠一らは、自然に涙が溢れてきた。牧野君の突入一週間前宮崎で偶然出会い、牧野君から「貴様は決して死ぬなよ」と激励をうけたことのある渡辺洋、江差追分のテープの提供者



である中島氏も、五八名の焼香が終るとテープも終わりであった不思議さに感動していた。

江差追分のメロデーが、焼香の場に似合うとは実に意外であった。参列者の中には、なぜ、江差追分が流れたのか知らないものもあり、後刻幹事が説明した。特攻はじめ戦死殉職多くの戦争犠牲者の方々の功績は、なお、顕彰しつづけていかねばなるまいと思われた。



追悼のことは述べる浅井鉄治（御遺族）前列右から藤森政子さん、小栗楓子さん、牧野正雄さん、三人おいて中嶋泰明さん

名簿に漏れた

特攻隊員

生田 惇

先頃「特別攻撃隊」が刊行されましたが、この中で最も苦心したのが、第二部 特別攻撃隊戦没者名簿でありました。これは、戦後厚生省で作成された同名簿を手掛かりにして、その後判明した方々を追加または削除して現在では最も正確と考えているものですが、もとより完璧ではないわけであります。この為お気付きの方からご叱正をお願いしていたのですが、飛行第百十戦隊会 会長から貴重な資料を頂きましたので、これについてこの紙面を借りて発表します。

飛行第百十戦隊は、四式重爆撃機を装備しサイパン島攻撃以来の練達の戦隊であります。従って、重要戦機に繰り返し出動するため、特攻を命じられることはありませんでした。

昭和20年4月下旬、沖縄の地上軍は嘉数付近の主陣地で激戦を展開中であり、28日の攻勢移転の計画を報告して来しました。同25日夜、百十戦隊の四機に出動が命じられました。任務は、この攻勢移転に必要な緊急軍需品の投下と沖縄北飛行場の制圧であったと思わ

神雷戦士之塔（桜花の碑）を

訪ねて

理事長 鈴木 瞭五郎

海軍陸上爆撃機銀河は操縦、偵察、電信の3座機である。台湾沖、比島の同じ機上で戦った私ども戦友3人は毎年一回の会合の場所を今年は鎌倉と定め、中攻会のメンバーでもある一人の発案で建長寺にある神雷戦士之塔に詣でることにした。10月29日午前11時ごろ車を建長寺門前で降り、建長寺本堂に頭を下げたのち、境内左側を奥の院に通ずる道路を奥へと進み、正統院の標示をみてその参道を上った。

神雷戦士之塔は院門の手前を左折した墓地台地の左奥の洞窟の中にあつた。訪ねる前には塔は建長寺塔中醍醐院であると聞いていたがそれは正統院であることがわかつた。聞けば正統院住職の御子息が神雷戦士の中におられ、その因縁でここに塔が設けられたという。

墓所は台風の被害を受けて洞窟の天井の岩壁は剥かれ落ち、秋の落葉が侵入してとても汚れている。

れ、掃除用具もお供え用のローソクも線香も揃っていた。掃除と水洗いを済ませたら、墓所は見違えるような杜厳なたたずまいとなり、私どもの気持も英霊に向つて清められた。丁度そこへ予科練の戦友一人がお詣りに訪れたの

と一緒に献灯と焼香を行なつて神雷戦士戦没者四七〇名余英霊の御冥福を祈つた。広大な建長寺境内の左奥にあるこの塔は一般参詣者の眼につきにくく、泉岳寺の赤穂義士に優るとも劣らぬ神雷戦士の墓所としては申訳ない。心ある方々の参詣が続いてお墓の清掃管理が行き届くよう切に願うものである。

た。私たち夫婦6人はお詣りする前に墓所のお掃除にとりかかつた。幸にして墓所内左側に物置が設備されてお供え用のローソクも線香も揃っていた。掃除と水洗いを済ませたら、墓所は見違えるような杜厳なたたずまいとなり、私どもの気持も英霊に向つて清められた。丁度そこへ予科練の戦友一人がお詣りに訪れたの



名簿に漏れた特攻隊員（続）

れます。この日は不連続線が、沖縄と九州の間に横たわり、二度の天候偵察機も飛行不可を報じるほどの悪天候でした。

悪天候と暗夜を衝いて一機は緊急軍需品の投下と飛行場攻撃に成功しましたが、二機が帰りませんでした。翌26日4時17分第三十二軍から、艦種不詳二隻の沈没を確認したとの通報がありました。そこで連合艦隊司令長官から「……折から暗夜悪天候の為目標の確認困難にして極力捜査中、偶々嘉手納沖に敵艦船群を発見するやその攻撃の好機なるを看破し、決然これに殺到し烈なる防御砲火を冒し必死必殺の体当たり攻撃を敢行し、よく艦種不詳二隻を撃沈の戦果を収め悠久の大義に殉ず……」という趣旨の感状が全軍に布告されました。

四式重爆撃機の搭乗区分は、機長・操縦・航法・通信・機関・後上方射手・尾部射手の各一名、計七名でした。当日の任務から考えて、当然全搭乗員が乗り組んで出撃されたものと考えられます。従つて64頁上段8行目の「会津大尉以下八名」は「会津大尉以下一四名」でなければなりませんし、85頁の飛行第百十戦隊（四式重）の項では

予科練戦没者慰霊祭に

参列して

理事長 鈴木瞭五郎

今年も10月14日(日)に第14回予科練戦没者慰霊祭が土浦市郊外の陸上自衛隊土浦駐屯地内雄飛園にある予科練之碑の前で盛大に行われた。私も招待を受け、車を駆って参列した。

園内は来賓、遺族、予科練出身者で溢れていた。式典は午前10時30分開始したが、その直前には旧陸海軍出身



パイロットの操縦するセスナ機が続々と慰霊慰行を行って低空を舞ってくれた。

海原会副会長桜井房一氏の開式の辞に続き、予科練の服を着た陸自隊員による献火がなされ、陸自儀仗隊による甲銃が響き渡った。国歌斉唱のあと、海原会会長前田武氏が愛憎警世の熱情を含めた追悼のことは捧げた。続いて菊花の献花が来賓、遺族、各界代表によって行われ、来賓のことは武器

学校校長郷原陸将補が行ない、引き続き今後の維持協力を約した。このあと遺族代表宮澤八重氏(甲飛3期・妹)

が追慕と感謝の意を含めて遺族のこゝとばを述べた。

終って奉納行事に移り、古谷りん女史の高松宮妃御歌奉詠に続き、同窓生一同による若鷺の歌奉唱が参拝者の涙を誘った。地元婦人会の若鷺の歌舞踊が今年も行われた後、隊員による郷土名物の太鼓が園内に轟いた。かくして式典は海原会霞ヶ浦支部長松田敏雄氏の閉会の辞によって盛會裡に終った。

このあと12時30分から直会が始まり、海原会会長前田武氏の謝辞に続いて地元阿見町町長が来賓挨拶を述べ、武器学校副校長佐藤氏により乾杯を行なって懇談会食に時を過し、午後2時閉会帰途についた。予科練戦没者一八、五〇〇名の御英霊もさぞや御満足されたことと心から御冥福を祈りたい。

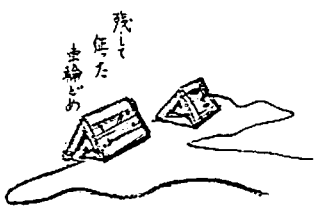


次の六名の方々の名前が欠落しています。

階級	氏名	出身県	出身	生年
曹長	出野次郎	広島	少飛	大正10
軍曹	中田五郎	愛知	昭和	大正8
軍曹	巽 利貞	奈良	昭和	大正10
軍曹	米谷光雄	奈良	昭和	大正10
伍長	佐藤武雄	群馬	昭和	大正12
兵長	夏目五郎	静岡	少飛	大正14

以上は、飛行第百十戦隊会会長 牧勝美氏からの資料を参考に整理したものでありますが、ここに謹んで訂正並びに追加させて頂きます。

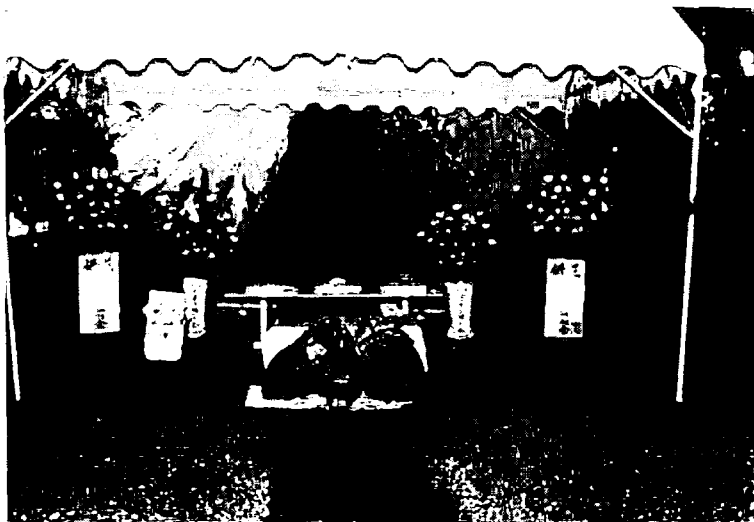
ただ私と致しましては、これについて若干の危ぐを拭い去ることが出来ません。それは二隻撃沈についての米軍側の裏付けが取り難い点と、何故厚生省作成の資料に六名のお名前が欠落していたかが解らない点であります。これらの点に付きましては、今後とも更によく検討を続けたいと思います。



和歌山県高野山
平成2年9月16日

慰 霊 祭

全日本空挺同志会

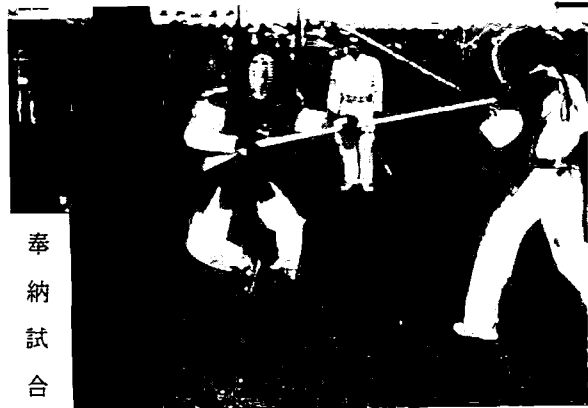
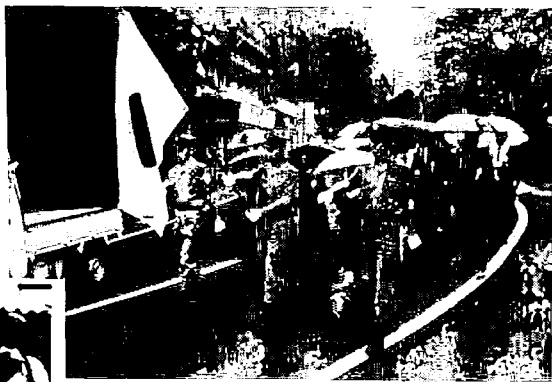


「空」の墓

これは墓であって碑ではない。戦死者は名簿を納めたが、自衛隊空挺部隊の殉職者も含め、会員で死去した者は、遺族の希望によって分骨を納めることになっており、本年も七柱の合祀が行われた。会員とは、昔の空挺隊員、自衛隊空挺隊員及び自衛隊空挺部隊に在職した者の三種である。



参列した自衛隊員



奉納試合

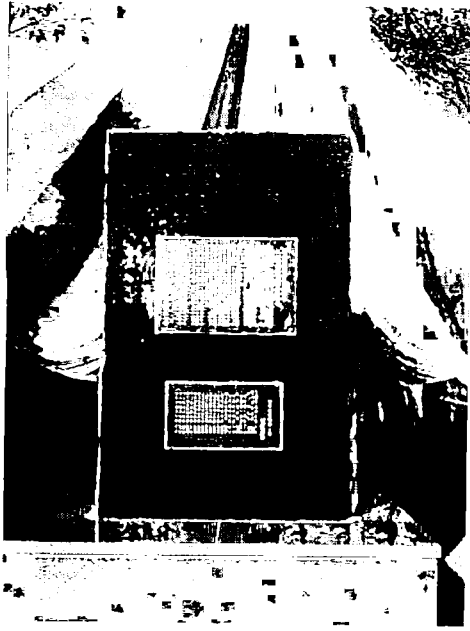
遺族及び会員二〇〇名が参列した。例年の通り不動院からの樺まで、信太山自衛隊の音楽隊を先頭に、慰霊行進を行った後、祭典を行った。雨が降っていたが、習志野の空挺団から若い後継者四〇人も参加していたので、またたく間に天幕が展張され、行事は滞りなく進んだ。
現職空挺隊員による銃剣術奉納試合もあり、最後は新旧声を合せて、「空の神兵」を高唱した。



平成2年11月23日

川南護国神社例祭

宮崎県児湯郡川南町



上が由来記、下が全部隊名である。

かつて陸軍空挺部隊の主力の基地であったこの地の護国神社には、地元出身の六三四柱の英霊のほか、一万余柱の空挺部隊戦死者もお祭りしており、毎年11月23日に全町挙げてのお祭りが行はれている。
空挺部隊戦死者を何故合祀してあるのか、その由来を刻した碑を境内に建立し、この度その除幕式を行った。



この碑は昭和38年に建てたもの、同じ場所にある

川南護国神社に空挺部隊 一万有余の英霊合祀の由来

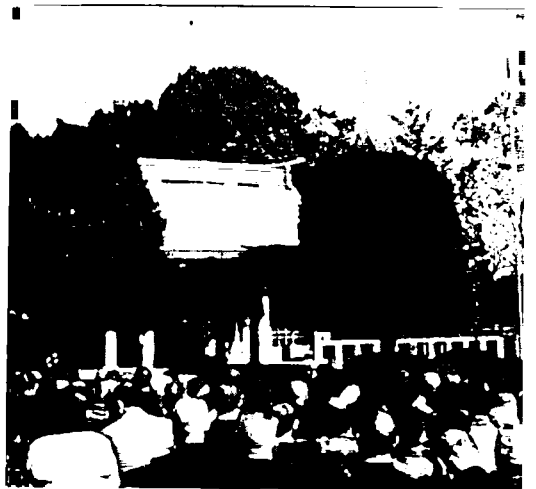
昭和十六年、川南村にあった広大な軍馬補充部の牧場が落下傘部隊の降下場に転用され、同年九月から使用を始めた。翌十七年には兵営が建設され、数千の落下傘兵がこの地で練武に励んだ。
天下る落下傘兵は、天孫降臨になぞらえて空の神兵と称され、村人の庇護後援のもと精鋭誇る空挺部隊が練武され、次々と南の決戦場に出て征き活躍した。

しかし、我々の悲願も空しく戦敗れ多くの戦友が戦野に屍を晒し、そのみ霊だけが当時豊原にあった陸軍進練習部構内の進進神社に神鎮り給うたのである。ところが、二十一年初夏の頃、宮崎市に進駐していた米軍は、理不盡にも進進神社を焼払ってしまった。振り所を失った英霊は、当時旧兵舎を校舎としていた宮崎師範学校の寄宿舎周辺を、毎夜白い体操衣袴姿で走り廻るといふ噂が立った。

そのようなことがあって、一時唐瀬の石川富士之助翁の仏壇にお祭りし、更に昭和二十四年この護国神社が再建されるに及び、こゝに合祀し今日に及んでいる。
護国神社の祭祀は、川南護国神社奉賛会によって永久に行はれることに感謝し、後世のためこゝに由来を刻しておく次第である。

平成二年十一月二十三日

陸軍空挺部隊戦友一同



述懐（おもいを述ぶ）

- 一、速つ祖の神々の 歩み給いしこの里に 訪い来れば懐しく 語りかけん尾鈴山 棚引く雲に憶いあり
- 二、あゝ純白の花負いて 我が青春の一餉の 臉に浮ぶ面影は 眺高きつわもの
- 三、重ぬる酒杯手を拍ちて友は歌いぬ 神つき節 南十字の星のもと 富む春秋を擲げうちぬ あゝ我が齢幾許ぞ
- 四、護国の神の御社に ぬかづく我等年経れど 海山千里天馳けり 共に抱きし心ざし 語り伝えん後の世に
- 五、花咲き鳥舞い月冴ゆる美しき郷よ日向路よ 子らに残せしこの山河 征きにし人の形見 なれ 後継ぐ人よ護れかし

写真集

「震洋特別攻撃隊」について

帝国海軍最大の特攻隊震洋の全容を伝える「写真集・震洋特別攻撃隊」(上下二巻、震洋会編・国書刊行会刊)が平成二年夏発行された。

本書は震洋(マルヨン)の特攻兵器採用から建造に至る経過及び部隊編成・訓練・基地進出とその戦果が部隊別に詳述されているほか、各隊別戦没者名簿(捉伏・「特攻・殉国の碑保存会」相田英雄会長・海兵66期)が掲載されている。一個部隊約百八十名の全震洋隊百十三個部隊史が同時に収録されたことは本書が初めて。これによって震洋隊全容が解明されたわけであり、その歴史的意義は極めて多大である。

本書刊行の動機は現状の推移は震洋特攻隊は忘却の彼方に消え去るのみという生存隊員の悲痛な願望による。前出の相田氏(第6震洋隊隊長、ポルネオ・サンダカン)は本書上巻の序文において、震洋隊独自の「秘密性」を次のように記述している。

「震洋特攻隊は帝国海軍が戦争末

期、方策尽きながら最大の期待をかけた特攻隊があったが①震洋艇の性質上、その存在を厳秘にした

②敵飛行機・艦艇の猛攻の中で、戦果を挙げた震洋隊はそれを報告する手段を全く持つことができなかった。このような戦時中の厳秘に加え、戦後は敗戦のため顧みることができず、戦史上無縁の存在として推移してきた。しかし、今にして何らかの記録を残さない限り、震洋隊のすべ

ては永遠に忘れられてしまう。事実、震洋隊ほど厚いベールに包まれた特攻隊はない。九州大村湾の「特攻・殉国の碑」に戦没震洋隊員三千六百柱が刻記されているにかかわらず、多くの海軍出身者は特攻隊震洋隊のあったことを知らなかった。

昭和五十六年の特攻隊慰霊顕彰会発足時に、同会海軍側役員が震洋隊を呼ばないため、震洋関係団体に参加を呼びかけることができなかったことは周知の事実である。

海軍の佐官クラスすら頭の中になかった震洋隊だから、一般国民は全くそれを知ることはできない。

芸術院推奨作家島尾敏雄氏(第18震洋隊隊長、海軍大尉)の著作「魚雷艇

学生」(新潮社刊・昭和六十年八月)が、野間文芸賞を受賞した時など多くのマスコミは見当違いの記事を書いて大騒ぎした。

島尾氏の海軍同期、第一期魚雷学生の多くは震洋隊に配属されたが、同書はその仲間が震洋隊でいかに戦ったかを綴ったものである。だが、マスコミは「魚雷を抱いて敵艦に体当たりボート」と書いた。艇の頭部に装備の二百五十キロ炸薬があるから体当たりすることができたが、魚雷では、いくらぶつけようがハンマーで叩こうが爆発はしない。爆発には水中を一定の馳走距離走ることが必要なのだ。

このように震洋隊は戦後長く、雲の彼方遠くに置かれてきた。「特攻隊慰霊顕彰会」による靖国神社遊就館特攻コーナーへの震洋艇模型展示と「特別攻撃隊」出版により、震洋隊は初めて国民の前に、その姿を見せることができたが、今回の「写真集・震洋特別攻撃隊」により、さらに全容を示すことが可能となった。

編集担当の震洋会(田中和会長)は各隊搭乗員の生き残りの組織であるが、そのいずれも、特攻隊員を誇りに全力をふりしぼって、その責務を遂行した。ことに写真担当の荒井志朗氏

(予科練甲飛13期、基地台湾)は、ほ

ば全震洋隊基地跡地を探訪して、その結果を本書に飾った。

最近、本書に接した基地所在の市町村の一部には、町おこし、村おこしの観点から、震洋隊基地遺跡と観光客誘致の拠点とする動きを示しているという。

本書に関する照会先は「震洋会」(東京都新宿区下落合二一五一―電〇三三―九五三―五八七)へ。

(特攻隊慰霊顕彰会理事野崎慶三)

特攻隊慰霊顕彰会

設立の経緯と現況

特攻隊慰霊顕彰会は、世田谷特攻観音の年次法要を末長く継続することを当面の目的として、昭和53年有志相集い設立した。しかし、会則を制定し組織が確立したのは56年である。

現在までに実施した主な事業は①靖国神社遊就館内の特攻隊に関する一室の展示品の作成と、②「特別攻撃隊」なる一書の発刊である。それ以外に毎年春には靖国神社に於て、また9月23日には世田谷の特攻平和観音に於て慰霊祭を行っている。更に全国各地で行はれている特攻隊関係の慰霊祭に、代表者が参列するように努めている。